

## ネオテニー仮説と<子ども>性：言語獲得の代償

土戸， 敏彦  
九州大学人間環境学研究院教育学部門国際教育環境学

<https://doi.org/10.15017/8049>

---

出版情報：大学院教育学研究紀要．8， pp.45-60， 2006-03-30．九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門  
バージョン：  
権利関係：

# ネオテニー仮説と〈子ども〉性

— 言語獲得の代償 —

土 戸 敏 彦

## 序

ネオテニーという現象が、生物学の世界では知られている。このネオテニーが、人間における固有属性の一端ともいうべき〈子ども〉性と深い関連にあるのではないかという着眼が、本考察の糸口である。ネオテニーに関するかぎり、これを考察するのは進化生物学の仕事であるように思われる。たしかに、(たとえ以下に述べるような行動面でのネオテニーを問題にしようとも)因果関係を含めて事実そのものを考察することはまぎれもなく科学的な作業ではある。だが、事実ではなく、その意味について思いめぐらすことは、かならずしも実証科学だけの仕事だとは言いきれまい。人間がネオテニーと化したことの意味、ネオテニーであることの意味には、ある種の謎が秘められているようにすら見える。この謎を追究する際には、いわばリスクな思弁さえ必要となるからである。

加えて、進化生物学的な視点からの説明と哲学の反省的思索とが重なる地点に思いを致し、両者はそもそも重なりうるのか、重なるとすればいかにしてか、という問いに迫ることも、視野のはるか彼方におさめたいと考えている。

ただし事がらの全体像があまりに膨大ゆえ、今回はいうならばアイデアの端緒の提示のみとし、したがって問題構成の一端の素描にとどめておきたい。ネオテニー現象から言語習得等の問題を経て、さらにその奥深くに分け入る試みは、次の機会に委ねざるをえない。

## I ネオテニーとは

ネオテニー (neoteny) とは、幼形成熟・幼態成熟などと訳されるが、要するに幼生や胎児にみられる特徴が成体になっても維持あるいは保存されることをいう。ネオテニーの説明に際してかならずといっていいほど例に挙げられるのは、アホロートルの生態である (かつて、そのアルビノ個体がウーパールーパーと称されて、広く紹介された)。正式和名メキシコサンショウウオもしくはメキシコサラマンダーなるこの両生類は、通常の両生類が行なう変態をせず、幼形のまま、つまり鰓をもったまま成体となって、性的に成熟し卵を生むのである。いわばオタマジャクシのまま成体となって、みずからがカエルになることを知らない奇妙な両生類というわけである。

ヒトもまたネオテニー的な様相をもった存在であることは、かなり以前から知られていた。19世紀末、ハヴロック・エリス (Havelock Eris) は、ヒトと類人猿の子ども同士は、両者の成体同士よりはるかに似ていること、さらに両者の胎児は、類人猿の大人よりもヒトの大人の方に似ていることを指摘している<sup>(1)</sup>。

その後、この現象をめぐる議論は次第に高まり、1925年オランダの解剖学者ルイス・ボルク (Louis Bolk) はヒトのこのような傾向を端的に「胎児化」(fetalization)と呼んだ。すなわち、胎児における平面的な顔、少ない体毛、大きな脳容量、四肢の構造、骨盤の形態など多くの身体的特徴が、他の動物では成長とともに変化するのに対して、ヒトにおいては成人になるまでそのまま維持されると指摘したのである<sup>(2)</sup>。要するに胎児化とは、発育速度の遅滞の現われだというわけだ。ボルクの説が胎児化万能論であり、旧式の進化理論に基づき、人種的偏見に立っていたことなど幾多の問題点を抱えていたのは事実である。が、この胎児化は、ダーウィンのいう外部条件への適応や自然淘汰の結果ではないというような見解に含まれる示唆は、われわれに今なお問題を投げかけている。

さらに、スティーヴン・ジェイ・グールド (Stephen Jay Gould) の叙述に従えば、古来から個体発生と系統発生をあいだに並行関係があることが指摘されてきたが、19世紀になって個体発生 of 諸段階が、組織化の低い動物の成体の形態を反復するという説と、それは反復ではなく、胚が類似しているだけで発生は未分化な同質から分化した異質へ進むという説とが競い合う状況になった。E.ヘッケル (Ernst A. Ph. A. Haeckel) を代表者とする反復説はほぼ必然的に崩壊するに至るが、その後に現われた多様な分類は、発生におけるタイミングの変更をもたらす結果としての反復と幼形化にのみ焦点を当て、他方の発生 of メカニズムないし過程、すなわち促進と遅滞についてはほとんど問題にされないという状況が続いた。

グールドは、過程と結果は相互に対応しているのではないこと、そして過程の方が結果より根源的であると主張し、促進と遅滞の双方とも、反復と幼形化を生み出しうるとする。そして、幼形進化にかぎれば、促進の結果としての幼形進化と遅滞によるそれとがあるという。前者はプロジェネシス (progenesis) と呼ばれ、性的早熟による個体発生 of 打ち切りを意味するのに対し、後者がネオテニーであって、一定の器官や部位における発達の遅滞の現われとされる。すなわち、ネオテニーとは身体部分の発育の遅滞によって生じた幼形進化であり、このネオテニーがヒトにおいて重要な役割を果たしたと、グールドは見ている<sup>(3)</sup>。

いずれにせよ、進化生物学において考察の対象にされているのは主として形態におけるネオテニーであるが、しかしヒトにあつてはむしろ着目すべきは行動におけるネオテニー現象であろう。モンターギュは、それまでのネオテニーをめぐる議論において、ネオテニーがヒトの行動の発達においてどんな役割を果たしたかという点が無視されてきたと述べている<sup>(4)</sup>。

おそらく、アルノルト・ゲーレン (Arnold Gehlen) は哲学的人間学の視点からそのことの重要性に気づいていたと思われるが、その影響下で行動面でのネオテニーに注目したのは、動物行動学者コンラート・ローレンツ (Konrad Lorenz) であった。彼は、行動様式が遺伝的に組み込ま

れていることを主張したが、その観点から「人間の本質的特徴、すなわち環境世界との積極的で創造的な対決の維持は、ネオテニー現象で<sup>(5)</sup>」あり、「真の大人の人間性にとってきわめて重要な特性は、いつも一つの発達途上のものであることなのだが、明らかに人間のネオテニー化のたまものである」<sup>(6)</sup>と述べている。

ちなみにリチャード・ドーキンス (Richard Dawkins) によると、行動が形態と同様に遺伝子型に対する表現型と見なしうるかぎり、形態の遺伝的支配と行動の遺伝的支配のあいだに原理的に何らの違いもないという<sup>(7)</sup>。ドーキンス自身によるネオテニーの説明は、かならずしも行動のそれを含んでいないが<sup>(8)</sup>、しかし表現型についての彼自身の理論からすれば当然、行動についてもネオテニーが該当するはずである。

## Ⅱ 〈子ども〉と〈大人〉

さて、第一の問題提起としたい点とは、以上のようなネオテニーなる現象が、人間の特質を根本的に形成していると思われる〈子ども〉性と通底しているのではないか、というものである。しかしながら、両者の関連を見る前に、手続き上ここで問題にする〈子ども〉および〈大人〉について簡単に説明しておくことにする。

筆者はこれまで、“子ども”“大人”について三種の区別を提唱してきた<sup>(9)</sup>。まず第一に、現実の生身の子ども、ないし事実としての子どもであるが、通常それは、年齢や身体的特徴から判断されることが一般的である。われわれの日常の用法の多くは、これに該当する。次に、規範としての子どもがあげられるが、これが意味するのは「子どもはこうあるべきだ」「こうあってほしい」と大人（正確には共同体）が考える理念・規範あるいはイメージ・願望としての子どもである（これを「子ども」と表記する）。粗っぽくいえば、教育の営みとは「現実の子ども」を「規範としての子ども」へと導く作業といえる。ところがこの二者に対して第三に、人間に内在する原理とも、あるいは性向ともいうべき子どもがある（これを〈子ども〉と表記する）。この内実は、年齢その他の属性にかかわりなく、あらゆる人間に内在する〈子ども〉性のことである。具体的には、〈遊び〉に象徴される無目的性・空想性・非日常性・没利害性などの傾向性といってよい。あるいは、厳密な意味にとらなければ、いわゆる「原始心性」に近いものとみなすこともできよう。ちなみに、〈子ども〉性とコントラストをなす原理としての〈大人〉性、すなわち共同体の維持存続、したがって諸規範の産出・共有をいわば使命とする傾向性もまた、すべての人間に内在していると考えられる。

さて、このように“子ども”について整理したうえで、前節に見たネオテニーをめぐる議論をふりかえると、ネオテニーにおける“子ども”論議の曖昧さが浮き彫りになる。とりわけモンターギュなどは“子ども”についてかなり雑駁な議論をしているようにさえ見える。

胎児または幼児の性質について、これが保存され維持されるという場合、“子ども”はどのような意味をもつことになるだろうか。たとえばモンターギュなどが引用・解釈する、「大人のなかには子どもが隠れている」というニーチェの言葉がある<sup>(10)</sup>。文字どおり受け取れば、この言明は矛

盾以外の何ものでもないだろう。“大人”“子ども”の語がどのような意味で用いられているかに、周回の注意を払わなければならないのである。

モンターギュのネオテニーについての議論のなかでは、子ども概念は混乱をきわめていると言ってよい。以下、彼の書から適当な箇所をランダムに選んで列挙する(下線は引用者)。

- A 「無文字社会の人たちのあいだで、こどもは、いっばんに大切にされ世話をされる。先史時代の私たちの祖先においても、おそらく同様だったにちがいない。こどもの“価値”や“質”がさがるといえるのは、現代社会の特徴のようだ」<sup>(11)</sup>。
- B 「私たちひとりひとりのなかには、過ぎ去った一時期のものとしてではなく、継続する性格の一面として、“こども”が住んでいる。それは、私たちが親切であったり寛大であったりできる能力とおなじように、進化上の事実である」<sup>(12)</sup>。
- C 「こどもの本性についてヨーロッパ社会が広く長くもちつづけた誤解は、今日ようやく、少しずつあらためられつつある」<sup>(13)</sup>。
- D 「私たちは、これまでそうでなければならぬと教えこまれた“大人像”になるよりは、むしろ“こどものまま”成長発達するよう定められている……」<sup>(14)</sup>。
- E 「胚・胎児・赤ん坊・幼児・こども・青年・成人・老齢者といった用語は、すべて、生物学的にも発達上の観点からも、いわゆる現実には対応していない、かなり恣意的なものである」<sup>(15)</sup>。
- F 「こどもの特徴としてもっとも重要なもののひとつが、寛容さ、つまり、すべての新しく起こる刺激にたいし“開かれている”ということである」<sup>(16)</sup>。
- G 「こどものネオテニー的な感性は、本来、自由と寛容とを成長させるのにあてられている。そしてどうもこれが、ほとんどの大人たちに“脅威”と受けとめられている」<sup>(17)</sup>。
- H 「こども (H1) のネオテニー的特徴をかぎりなく伸ばすこと、生涯をつうじてこの特徴を継続的に成長発達させること、この重要性を、現代人は緊急に理解する必要がある。つまり、私たちは“こども” (H2) として成長するようになっているのである」<sup>(18)</sup>。

読み流すかぎりでは何の問題もなさそうなこれらの文章は、しかし、“子ども”という語に着目するならば、その意味はかなりの振幅で振れていることがわかる。

つまり、“子ども”と言っても、現実の存在を指しているのか、規範や願望を託しているのか、それともさらに別の意味を含ませているのか明確でなく、指示対象がそのつど違ったものになっているのである。

現実の存在という意味での子どもは、A・E・H1などに見られ、規範としての「子ども」はC・D・F・G・H1に、原理としての〈子ども〉はB・D・F・G・H2などに窺われる。ただし、以下に見るようにモンターギュにあっては〈子ども〉性がすでに規範化されているので、「子ども」と〈子ども〉の区別は曖昧である。

モンターギュの議論における問題点と目されるものを整理すると、以下のようになる。

1. 「生涯子どもであることがヒトの特徴である」という事実言明と、「子どもはすばらしいものだ」という価値判断とが、融合している。それは、議論の基調が全体として子どもを美化する

方向にあることに起因している。

2. ネオテニーという概念が、記述的な意味と、人間はそうあるべきだという規範的な意味の両方に用いられている。「子どもの特性が大人にまでもちこされている」という意味ではネオテニーは事実であるが、「子どもの特性を生涯にわたって伸ばすことが重要だ」と主張されるときにはネオテニーは規範と化している。
3. このようなモンターギュ流の把握をすると、そこからは原理としての〈子ども〉すなわち〈子ども〉性こそが、行動上のネオテニーの正体だという洞察は生じがたい。

モンターギュは、三種の子どもを雑然と用いている。当然、彼にも子どもの記述的な意味があるが、しかし全体として子どもを規範的な意味に解していることは明らかである。そのことはルソー以前の子ども観に対する彼の批判によく表れている。子どもの本性について西洋社会は長い間誤解していたが、「啓蒙時代」になってルソーの考え方の影響によって子どもは妥当な見方をされるようになった、と彼はいうが、その彼の主張は、子どもは生まれながらにして邪悪だというかつての見解から生得的に善であるという見解への転換でしかない。マイナスからプラスへと逆転しただけであって、規範的に解する点では同じ路線の上にある<sup>(19)</sup>。しかし彼にあっても、この規範的な意味とリンクしながら、子どもが大人のなかにもあるという言い方がなされるのである。これは、すべてが規範的な意味と解されるわけではないことを意味する。すなわち、時としてネオテニーの結果として大人の中に子どもが存在していると、彼は主張するのである。そして、まさにそれこそが問題とされ、焦点化されねばならない点である。

さて、以上のように三種に区別したうえで〈子ども〉が確定されたはずであるにもかかわらず、その〈子ども〉には微妙な二義性が潜んでいるように思われる。単純化すれば――

1) 遊びにふける原始心性としての〈子ども〉

2) 「なぜ？」という問いを発する〈子ども〉

である。

両者は一見して異なるように思われる。前者の〈子ども〉は共同体とは無縁であり、したがって諸規範にかかずらうことなく、基本的に快のみを求める。〈子ども〉をフロイト説におけるエスにたとえる場合、該当するのはこちらの〈子ども〉である。他方、後者の〈子ども〉は、幼児がしきりに発する「なぜ？」という問いに代表される。見方によってはこの問いは、哲学の出発点だということさえできよう。つまり、一方は生命の基底レベルのことがらのように思われ、他方ははなはだ知的な営為のように見える。

もしここに〈子ども〉の二義性が存在するのであれば、この二義性はこれまで曖昧にされてきたと言えるかもしれない。両者は異なるのか。異なるとすれば、いかに異なるのか。また、それぞれネオテニーといかなる関係にあるのか。たしかに言語を視野に入れないかぎり、ネオテニーを問題にする際、前者のみが想定される傾向にある。それは、ネオテニーが生物学出自の概念ゆえ当然であろう。しかし言語というものが生じて以降、事態は変化するように見える。果たして、その連関はどうなっているのか。

### Ⅲ 人間におけるネオテニーの意味

議論の焦点をネオテニーに戻してみる。そもそもいかなる意味でネオテニーが人間にとって重要であるのか。ヒトがネオテニーと化した理由は何であろうか。ネオテニー化する何らかの必然性があったのか。

さしあたり予想されることは、ヒトにおいてネオテニーと目される形態上のさまざまな現象が存在するが、それらは行動上のネオテニーのなんらかの状況証拠たりうるだろうという点である。とはいえ発生に際しては、各器官は適応の要求に応じて別個に進化するという事実、すなわちモザイク進化ということが指摘されており、ネオテニーの各要素は相互に無関係に発現するとも考えられる。だとすれば行動的ネオテニーは、その他の無毛や脳屈曲などとは直接の関係をもたない可能性もある。したがっていずれにせよ、ここでは他のネオテニー現象を度外視し、行動上のネオテニーにのみ照準を絞らざるをえない。

とはいえ行動上のネオテニーについて、教育学のある種の教科書に見られる説明のように、そこから単に「可塑性」「教育可能性」という一言半句を引き出して済ませるわけにはいかない。多くの教育学的説明は、ネオテニーであるがゆえの教育の必要性をことさらに取り上げるが<sup>(20)</sup>、ヒトがなぜネオテニーと化したかの必然性について問わないからである。

仮説的に考えられるのは、次のようなことである。すなわち、ある種の淘汰圧が働いた結果、ヒトはネオテニーと化したのであろう。進化の原則からいって、ヒトにあっては行動上の発育遅滞すなわちネオテニーに何らかの利点があったと想定されることになる。しかし、常識的にはそのような発育遅滞が生存の上で有利な何かをもたらすとは考えにくい。たとえば、養育期間が延長されざるをえず、そのことは捕食や生殖等に多大な負の影響を及ぼすだろうからである。しかしにもかかわらず、ヒトはネオテニーと化した。これについてのゲールドの解釈は、ヒトは学習を強化するために、性成熟を遅らせて幼児期を引き延ばしたというものである。そして、ヒトの子どもは長期間両親に結びつけられ、その結果、学習期間を延長しただけでなく、家族の紐帯をも強固にしたというわけだ<sup>(21)</sup>。しかしここでは方向をやや転換して、以上の疑問に対する解答のヒントを、人間学と呼ばれてきた分野の中に探索してみたい。

たとえばM. シェーラー (Max Scheler) は、動物は各々の環境世界に縛りつけられているのに対して、精神としての人間は世界に対して開かれていると考える<sup>(22)</sup>。あるいはゲーレンは、人間は胎児状態を保持するがゆえに生存のための器質的手段を欠如した「欠陥動物」であるが、その代償として直立歩行、言語、技術的行動などの文化的手段を手に入れ、これらによって欠陥に由来する負担が免除されるという<sup>(23)</sup>。

要するに、人間にあっては(環境)世界との関係の取り方が固定的、一対一の対応ではなくなったというわけである。あるいは、時間軸でいえば未来に対して開かれたスタンス、つまり未決定という状態をとることになった。これをもって、人間においては本能が壊れてしまったという言い方がなされることにもなるのである。

このことは人間特有のさまざまな行動となって現われたことであろう。すなわち、生存にとって必要不可欠であり、理に適った必然的で無駄のない行動とは考えられないさまざまな行動が、人間には出現したのである。たとえば人間は成体に至っても、好奇心が旺盛であり、一般に「遊び」と称される、目的性をもたない行動や必要のない活動を頻繁に行なう。一言でいえば、〈子ども〉性が成体となっても残されたということであろう。

もちろん、このような結果をポジティブな意味に解することができる。好奇心をもったり、遊んだりすることによって、環境世界に対して探索活動や実験的試行を繰り返し、これらを通じて環境世界およびそれとの関係を認識し、把握していくと一応は言える。おそらく進化という面からみれば、世界に対してオープンであることは、他の種に比べて異常なほどの「進化速度」を招来したと思われる。

以上のことに、たとえばモンターギュは全面的なプラス評価を与える。彼が「幼児のもつネオテニー的衝動」として挙げているものをいくつかピックアップすれば、「知る欲求」「学ぶ欲求」「好奇心」「驚く心」「遊び心」「実験精神」「探索する心」など<sup>(24)</sup>があるが、のみならず「愛の欲求」「友情」「寛容さ」「ユーモアのセンス」「笑いと涙」「楽天主義」「正直さ」そして「ダンス」や「歌」までもが、子どもの欲求として賞揚されている。「こどもとは、成長し健康と調和を成就する方向にむかう衝動をもって生まれる」<sup>(25)</sup>と、ほとんど最良の引き倒しの感を催させるほどの子ども礼賛であるが、ここまで単純明快に割り切ることが可能であろうか。

果たして、ネオテニーは「プラス」の効果としてのみはたらくわけではない。そのことは、ゲーレンが知っていたし、ローレンツもすでに指摘している。人間は「危険を冒す」「失敗する」生物であり、「行動の新しい弾力性は、ある程度の安全性の放棄によって一つ一つあがなわれなければならなかった」<sup>(26)</sup>と、ローレンツは述べている。たしかに人間は環境世界に対して開かれ、柔軟な対応をなしうるようになったが、その分、危険を回避し対処する機制や、防衛し防備する態勢が貧弱になり、またシェーラーのいわゆる「世界開放性」(Weltoffenheit)という存在様式ゆえに無駄で余計なエネルギーや労力を費やさなければならなくなった。

そもそも〈子ども〉性がプラスであるかマイナスの面をもつかなどという議論が〈大人〉の視点によるものであり、〈子ども〉それ自体に属するものではまったくない。子どもは生まれながらにして善か悪かという議論が古くから存在するが、少なくとも〈子ども〉はこの議論とは無縁である。その意味では、〈子ども〉は善悪以前とも、善悪未分化ともいえる<sup>(27)</sup>。同様にして、人間の生存にとって〈子ども〉性は、プラスであるとは決して言い切れない。それはプラスでもマイナスでもありうるし、あるいはプラスでもマイナスでもない。おそらく、このような価値評価を超えたところに〈子ども〉は位置するのであろう。

してみると、奇妙な結論が待っていることになる。すなわち、〈子ども〉性の残存を適応論的に説明することはできない、ということになる<sup>(28)</sup>。人間にとって〈子ども〉性が生涯にわたって残り続けるのは、かならずしもそのことが環境に適応的だからというわけではない。むしろ場合によっては、逆に〈子ども〉性は、人間を危険にさらすこともありうるのだ。



(ネオ・ダーウィニズムも含めて) ダーウィニズムにおいては、生命が営まれるということは、ただちに進化の過程を歩んでいるということになり、そしてまた逆も成立するということであろう。しかしそれは普遍的な原理として証明されたのであろうか。つまり、進化のプロセスが生命の法則を超えないことを、何ものも保証しているわけではないのではないか。生命の法則が絶対であるならば、人類にあって全生命滅亡を招来する核戦争などの人為災害は勃発しないと言わねばなるまい。遺伝子はそのようなことを、ヴィークルであるヒトには決して命じないはずだというわけである。しかし事がそんなに都合よく運ぶことなどありえないことは、議論するまでもない。つまり、人間において進化の過程が生命法則を超えかねないことは、とりわけ近年無気味な兆しとして現われているのではないか。そして、その点こそが今や問題なのだ。

#### IV ネオテニーと言語

〈子ども〉の説明に際して、言語が微かに顔をのぞかせた。そもそも生命体にとって一大事件であるにちがいない言語およびその誕生は、ネオテニーといかなる関係にあるのだろうか。

西脇与作は、言語習得がネオテニーと類似しているとする。その事情を次のように説明している。「言語習得という側面からみれば、子供は言語の原型を遺伝的に持っているというより、文法習得の可能性を持っているといったほうが適切であろう。そして、この可能性が遺伝的に決定されているのである。遺伝的に決定された可能性は、言語習得の過程で経験的な言語状況に応じて、そしてその刺激が時間的、空間的にどのように与えられるかに応じて、結果が異なってくる。このように述べると、遺伝子の時間的な調節が有効に働いているネオテニーと著しい類似性をもってくる」<sup>(29)</sup>。

しかしこのことだけをもって、言語習得ないし文法習得をネオテニーすなわち発育遅滞による幼形進化と関連づけるのは困難ではないか。ここには、それがなぜ遅滞であるのか、あるいは少なくともなぜ遅滞と関係しているのかという理由はどこにも示されていない。

むしろ遅滞ではなく、事がらとしては逆であるようにさえ思われる。周知のように言語習得活動は幼児期に異常なほど励起する。つまり言語習得の過程は、見方によれば成熟促進現象の一つのようにすら見えてくるのである。言語習得に時間（年齢）的な臨界期があるという事実は、そのことを裏書きしているのではないだろうか<sup>(30)</sup>。

以下、人間における言語の習得を、ネオテニーとはいわば逆の方向から考えてみるとどうなるかをスケッチしてみたい。

まず一般に承認されうるのは、恣意性を経由しない言語は存在しないという事実である<sup>(31)</sup>。N. チョムスキー (Noam Chomsky) は、ヒトの言語能力は生得的だという主張を展開した。これについては異論もあるが、仮にチョムスキーのいう通りだとしてみる。その場合、この潜在能力が現実化する際には、いかなる言語といえども不可避の条件として恣意性のハードルを超えねばならない。つまり、ある物体、ある事象、ある動作、ある状態、ある性質等々を名指すのに、避けがたくなんらかの記号を用いることになるが、その際その記号は、必然的に恣意的な形態を取らざる

をえないのである。林檎の実を「リンゴ」「apple」「pomme」などと呼ぶことを、理屈抜きに、いわば目をつむって呑み込まねばならないのだ<sup>(32)</sup>。

いかなる言語も、ソシュール (Ferdinand de Saussure) が明らかにしたように独特の恣意性を有している。人為がしからしめる恣意性はほかにも多々存在するだろうが、言語の恣意性こそは、個々の人間が生まれて最初に出会い、かつ呑み込まねばならぬものであろう。恣意性を恣意的だと受け取らず、理屈抜きに受容する瞬間、すなわち自明なものとして受けとる瞬間こそ、〈大人〉性の胚胎を意味する。その意味で言語の恣意性は、〈大人〉の特性であるところの〈自明性〉の基盤を提供する。

というのもこの言語の恣意性は、言語を獲得する者にとって恣意的とは映らない、あるいはむしろ映ってはならないものだからである。したがって、ここでいう〈自明性〉とは、恣意性が恣意的でないような見かけをとって、たとえば林檎の実が「リンゴ」と呼ばれることが必然かつ当然であるかのように現出することである。言語はそうように習得されるべく宿命づけられている。その意味で、言語の恣意性は〈自明性〉の源泉である<sup>(33)</sup>。

しかし他方、注意しなければならないもう一つの点とは、以下の事がらである。すなわち、〈自明性〉とは、問う能力があるにもかかわらず、問う必要がないこととして事がらを問わずにすませるという、まさにこのことをいう。問う能力が存在しないところでは、そこにはそもそも〈自明性〉もない。〈子ども〉が（したがってまた〈哲学者〉が）自明なことに対して「なぜ？」と問いうるのは、それゆえにこそである。

言うまでもないが、問うことは言語を前提している。いかなる問いも、言語なしにはありえない。ということは、言語なくしては〈自明性〉はないということである。つまり言語は、問う能力を提供することによって〈自明性〉の基盤を形成している。

ここには、込み入った逆説がある。一方で言語は、恣意性が恣意的でないかのように習得されることによって〈自明性〉をもたらす。しかし他方で、まさにその言語によってこの〈自明性〉について問われることが可能になる。言い換えれば、言語こそが相互媒介的に〈大人〉性をも〈子ども〉性（厳密には言語発生後の〈子ども〉性）をも生み出しているのである。

つまり、ヒトにあっては幼児期からすでに〈大人〉が出現するということになるが、それは人間特有の言語に由来する。言語習得がネオテニーとは逆の方向にあるのではないかと先に述べたのは、このような理由からである。要するに、人間は言語習得と引き換えにネオテニー化するといつてよい。つまり、早期に〈大人〉性を確保したために、〈子ども〉性を後々までひきずることになるというわけだ。

とはいえ、言語はむしろ言語だけで孤立して発生するのではない。言語の起源についてはさまざまな説があるが、複雑な社会活動を行なう際の情報伝達の効率性に起因するという考え方<sup>(34)</sup>は最も妥当な説の一つであろう。してみると、言語発生に際してはすでに種々の社会関係・文化的状況があったはずである。つまり言語が発生した時点においては、人間は同時に強力な社会的・文化的淘汰圧にさらされていたと考えられる。他の動物とは決定的に異なるのは、この社会的・文化的な

淘汰圧が当の発生期の言語によって媒介されるという点である。

前節でみたように、文化的淘汰圧はヒトにたえず〈子ども〉であることを要求する。ただし、文化的淘汰圧が自然の淘汰圧とは異なる点は、後者がヒトの自然への適応性のみを要求する一方的な関係でしかないのに対して、前者においては適応性を要求する文化が実は人間が設定したものであるという双方向的・循環的な関係であるという点である。そして当然ながら、ここで文化を「設定」する人間とは、人間に内属するところ〈大人〉である。

いかにも不思議なことではあるが、幼児前期を越すと言語の習得は困難になる。これについては臨界期の存在が指摘されている<sup>(35)</sup>。この事実は何を意味しているのだろうか。

明らかなように、言語の習得はたとえば知識の習得とは根本的に異なる何かである。このことを〈子ども〉性・〈大人〉性と突き合わせてみよう。

まず、言語の習得には〈子ども〉性にマッチしている何かがあるということが考えられる。むしろこの言語とは、文字や語彙のことではない。それらの習得はむしろ〈大人〉の得意とするところである。なぜなら、それらは恣意的記号そのものだからだ。〈子ども〉性に応ずるのはむしろシンボル体系としての言語であり、これは語彙を覚えるように徐々に習得されるものではなく、一挙に獲得される。言語といわれる総体のなかで、〈大人〉性に対応する恣意的な部分と〈子ども〉性に親和的な部分があると考えられるのである。

それにしても、なぜ言語は幼児期でなければ習得が困難なのか。幼児期以降、年齢とともに諸能力（思考・判断・記憶等）が増大することが認められるが、そうであれば、言語習得能力も同様に増大してもよさそうだが、事実是这样ではない。

このことに関して、T. ディーコン (Terrence Deacon) はチョムスキーを批判しつつ、E. ニューポート (Elissa L. Newport) の説に基づいて、子どもが学習するのに有利になるように言語に対して淘汰圧がはたらいたと見る。その結果、言語は大人より子どもにフレンドリーになったというのである<sup>(36)</sup>。しかし、もしそうであるならば、言語における恣意性は低下したはずである。だが幼児語などが一時的なものでしかないことや、諸言語が幼児のために進化したなんらの共通の形跡もないことを考えると、この説はさしあたってのところ疑問である。

いずれにせよ、言語には〈子ども〉に親和的な要素と〈大人〉に適合した要素の両側面があると考えられるほかなさそうである。S. ピンカー (Steven Pinker) が「本能としての言語」<sup>(37)</sup>と記し、教えられなくとも子どもが言語を獲得すると述べた要素は、〈子ども〉に対応するのであろう。

そうだとすれば、先に触れた〈子ども〉の二義性と見えたものは、言語能力が顕在化し具体化する以前と以後の差異ということになる。われわれの考察それ自身が言語に媒介されているために、言語に媒介された〈子ども〉とそれ以前の〈子ども〉とを異種のもものと見なしてしまうとも言える。ネオテニーとは〈子ども〉性の残存であるが、言語習得を境に〈子ども〉性は大きく屈折し、〈大人〉性との対峙関係をとるようになるのである。

言語習得によって〈大人〉性がいささかなりとも獲得されるや否や、その適応性は促進され、その結果言語習得を通じての〈大人〉性の増大には拍車がかかることになる。相対的に〈子ども〉性

は減少せざるをえない。年齢とともに言語の習得が困難になるのは、まさにこの理由からではないか。

言語規範を代表とする諸々の文化規範に対する順応が〈大人〉性を醸成することだとすれば、その代償として〈子ども〉性はいわば世界開放性として残存せしめられる。というのも、言語に含まれる恣意性は風土や慣習に依存し、きわめてローカルなものだからである。つまり固定的・強制的な意味合いをもち、したがって閉鎖的なのである。こうして文化的淘汰圧は、一方でなるほど恣意性を含んだ言語の習得を要請し、自明な世界へと引きずり込むが、しかしまた他方同時に、「ランダムに問う」可能性、危険であろうとなかろうと未知の領域への志向性をも称揚する。なぜなら、これらは共同体の進歩・発展・競争にとってきわめて有用だと、共同体自身が見なすからである<sup>(38)</sup>。

かくて、新奇なことへの渴望・冒険・挑戦、そしてまた「ランダムに問うこと」の可能性はたんに許容されたのではなく、(危険と抱き合わせになった) その有用性に基づいて、むしろ要請されることとなった。いったん発動した文化的淘汰圧は、ヒトを永遠に未完の存在であることを運命づける。つまり、これが、行動面でのネオテニーとなって現象しているのである。

## V 二つの次元の遭遇に向かって——反省的知性の問題

最後に、本テーマの今後を展望するための問いを提出しておきたい。

〈子ども〉性・〈大人〉性は、ヒトに特有の事象である。その理由は何よりも、言語が介在しているからである。そして、そこからさらにヒト特有のこととして、生命進化の原則を逸脱するかもしれない自己意識あるいは反省的知性という問題が浮上してくる。このような反省的知性がことさら問題になる場面は、わけでも〈子ども〉の「なぜ？」という問いに際してであろう。

答えようのない「なぜ？」という問い（たとえば、「私はなぜ存在するのか？」）は、どこから生ずるのか。はなはだ論理の飛躍のように見えようとも、これまでの説明に立つかぎり、それは人間におけるネオテニーがなせる業だといってよい。すなわち、一方では「なぜ？」の問いの発生源は生物学的ないし人間学的に説明がつくということになる。

そもそも生命は、その誕生以来、それ自身（この「それ自身」というのは遺伝子だというのが現代の定説である）を維持し、存続させ、繁殖させるように進化してきた。（遺伝的浮動というケースも考えられるにせよ）多くの場合、自然淘汰を通じて進化はなされてきた。現代の進化生物学は、生命進化の大枠についての説明を可能にしている（あるいは、可能にするだろう）。

しかしヒトというこの種についてはどうであろうか。人間については、その説明の枠組みを超えるものはないと断言できるだろうか<sup>(39)</sup>。

知性、正確には自己言及的知性から発する問い——これは、進化論の延長上で説明されえないものを含まないか。なぜなら、この知性は進化の原則によって規定されない要素をもち、したがってその原則に抗いうる可能性をも有するからである<sup>(40)</sup>。

たとえば、「いかに利益を得るか」「いかに支配しうるか」という功利的な問いであれば、進化の

原則になんら抵触しない。あるいは「いかに生きるべきか」「社会はいかにあるべきか」という当為の問いであっても、生の原則、さらには進化の原則にかなっていると見ることができる。そうではなく、進化の原則にかならずしも沿わない問いとは、実は〈子ども〉の問いのなかにある（もちろん〈子ども〉の問いといえども、進化原則にかなっているものが大半であるが）。「なぜ私は存在するのか？」の問いの生起は、生物学的に説明がつかないのではないか。

この場面で肝要なのは、このような〈子ども〉の問いをもはや適応論的に説明することではない。私が「なぜ？」と問うこの問いが、一方でネオテニーに由来すると考えることができ、他方で進化生物学的によって説明がつかないとすれば、むしろ問われているのは、このような反省的知性の問いとネオテニーはいかに符合しているのか、という問題であろう。

整理してみる。「なぜ……？」と私が問う際、そこに〈子ども〉性が現われているとされる。そして、この〈子ども〉性はネオテニーに由来すると言われる。しかしこの問いを問う私においては、ネオテニーに由来するという説明によって、問いが発出してくる根源の謎が氷解するわけではない。ネオテニーによる説明はしょせん、外部からの説明だからである。

すなわち、問題は次元を異にした二つの事がらが遭遇する地点にある。

よって、本論文を締めくくる言葉とは、次の問いである。——生物学的な説明と、生物学を超える問い＝反省的知性とは、いかに合致するか。

それは、このテーマをめぐる究極の問いであろう。しかし現段階では、この問いは開かれたままにせざるをえない。

## 註

- (1) Ashley Montagu, *Growing Young*, 2nd ed., Westport 1989, p.6, 211-12. モンターギュ（尾本恵一・越智典子訳）『ネオテニー 新しい人間進化論』どうぶつ社, 1995, 16頁, 287-288頁（訳は一部改変した場合もあるが、ほぼ邦訳に従っている。以下同じ）。
- (2) Ibid., p.6. 同訳書, 16頁。ちなみに「ネオテニー」という用語を最初に使用したのは、バーゼル大学の動物学教授ユリウス・コルマン（Julius Kollman）とされ、1884年のことである。
- (3) Stephen Jay Gould, *Ontogeny and Phylogeny*, Cambridge 1977. グールド『個体発生と系統発生』工作舎, 1987。
- (4) Montague, op.cit., p.46. 同訳書, 81頁。
- (5) ローレンツ（日高敏隆・丘直通訳）『動物行動学・下』ちくま学芸文庫, 1997, 270頁。
- (6) 同書, 271頁。
- (7) Richard Dawkins, *The Extended Phenotype*, Oxford 1982. p.199. ドーキンス（日高敏隆・遠藤彰・遠藤知二訳）『延長された表現型』紀伊國屋書店, 1987, 371頁。もっともドーキンスは、表現型の概念をさらに延長して、クモの巣やビーバーの作るダムでさえ遺伝子の表現型効果と考えるに至る。

- (8) Ibid., p.291. 同書, 507頁。「性成熟の発達に比して体の発生が進化的に遅滞すること。結果として, 祖先形の幼体期に似た生物体によって繁殖が行なわれることになる。たとえば脊椎動物の起源といった, 進化におけるいくつかの大きなステップはネオテニーを通じてもたらされた, という仮説が提出されている。」
- (9) 拙著『冒険する教育哲学 — 〈子ども〉と〈大人〉のあいだ』勁草書房, 1999, 参照。ただし, 三種に分類するのは便宜上のことであって, それらは決して同格であるかのように並列するものではない。なお, ここにおける “ ” という括弧は, 三種のいずれであるかに関係なく, 包括的にあるいは無規定的に指すために用いる。
- (10) モンターギュと同様ローレンツもこの箇所を引用している(出典は明示されていないが『ツァラトゥストラ』の一節「老若の女どもについて」に相違ない)が, しかし実は, その引用は完全な誤解にもとづいている。

当該の件りを, モンターギュは「真の人間のなかにはこどもが隠されている(In the true man there is a child concealed) — 遊びたがっているこどもが」と解する(op.cit., p.130. 前掲訳, 194頁)。

しかし, ニーチェが語っているのは「真の人間」などではない。文脈からして間違いなく, それは「真の男」である(Im echten Mann ist ein Kind versteckt)。というのも, この文に先行する文章は, 「男より女のほうが子どもたちをよく理解する。だが, 男は女より子どもっぽい(der Mann ist kindlicher als das Weib.)」であり, また後続するのは, 「さあ, 汝ら女性たちよ, ぜひとも男の内なる子どもを発見せよ!(Auf, ihr Frauen, so entdeckt mir doch das Kind im Manne!)」という文章だからである。Nietzsche Werke, Historisch-kritische Ausgabe (CD-ROM), copyright 1994 by Walter de Gruyter & Co., Also sprach Zarathustra (1883-1885), Von alten und jungen Weiblein, Record 10361/18204.

ニーチェ好みの女性論でかならず引き合いに出されるこの種の“子ども”は, ここで問題にしようとする〈子ども〉ではまったくない。蛇足ながら, ネオテニー説からいえば, むしろ「女」の方が「子どもっぽい」のである。このことは, モンターギュ自身が(身体的特徴についてではあるが)明言している(p.27. 54頁)。そして彼独特のネオテニー礼賛にもとづいて, 「女性は男性よりも, 私たちの種の未来を約束する」(p.14. 35頁)とまで述べている。

- (11) Montague, op.cit., p.63. 邦訳, 104頁。
- (12) Ibid., p.85. 邦訳, 135頁。邦訳には “ ” があるが, 原著には括弧はない。これは, 訳者が原理としての〈子ども〉に気づいていることを示している。
- (13) Ibid., p.91. 邦訳, 143頁。
- (14) Ibid., p.94. 邦訳, 145頁。原著に括弧はない。
- (15) Ibid., p.98. 邦訳, 152頁。
- (16) Ibid., p.141. 邦訳, 207頁。
- (17) Ibid., p.142. 邦訳, 同上。

- (18) Ibid., p.197. 邦訳, 272頁。原著に括弧はない。
- (19) Ibid., p.91-92. 邦訳, 143-44頁。
- (20) 河田雅圭「心理学・教育学の生物学的基盤は大丈夫か?」,『現代思想 特集＝ドーキンス』1992, 5月号, 青土社, 所収, 参照。教育学は「生物学のなかから, 自説に都合のよい, それも古くさい理論を選びだし, それをもとに教育する重要性を説いているように思える」(173頁)と河田は述べている。
- (21) グールド(浦本昌紀・寺田鴻訳)『ダーウィン以来』早川書房, 1995, 104頁。
- (22) Max Scheler, *Die Stellung des Menschen im Kosmos*, 6.Aufl., Bern 1962. S.40-41. シューラー(亀井裕・山本達訳)『シューラー著作集13・宇宙における人間の地位』白水社, 1977, 50-51頁。
- (23) Arnold Gehlen, *Anthropologische Forschung*, Hamburg 1961. SS.34-37, 46-54. ゲーレン(亀井裕・滝浦静雄他訳)『人間学の探究』紀伊國屋書店, 1970, 119-23, 138-53頁。
- (24) Montague, op.cit., p.107. 邦訳, 162頁。
- (25) Ibid., p.96. 邦訳, 148頁。
- (26) ローレンツ, 前掲訳書, 273頁。
- (27) 拙稿「〈遊〉なるがゆえの〈子ども〉の教育不可能性」,『九州大学大学院教育学研究紀要』第5号, 2003, 所収, 参照。
- (28) 人間のどんな行動をも適応論的に説明することも可能だ, という見解もありうるだろう。たとえば, 幼児虐待を適応論的に説明することも可能である(長谷川寿一・長谷川眞理子『進化と人間行動』東京大学出版会, 2000, 148頁)。しかし, 何もかも適応論的に説明可能かという点, 答えはやはり否定的である。若年者の自殺はその例であろう(同, 269頁, 参照)。
- (29) 西脇与作「ネオテニー 成長と進化」,『現代哲学の冒険2・子ども』岩波書店, 1991, 121頁。
- (30) プロジェネシスとされる現象は性成熟の促進に由来する以上, これをプロジェネシスと見ることはできないだろうが, 成熟の促進現象と見ることはできるだろう。
- (31) 類人猿によって習得可能だとされる身振り言語は, たしかに恣意性の度合は少ない。ことはシンボル能力に関わっていて, 身振り言語には決定的な恣意性が存在しないのかもしれない。
- (32) もっともこのことは, 言語能力が生得的であろうとなかろうと妥当する。なお, 理屈抜きに呑み下すという特異行為は, 教える側から言えば次のようになる。「言語を教えるということは, それを説明することではなくて, 訓練するということである」(Wittgenstein, *Philosophische Untersuchungen*, §5. Werkausgabe Bd. 1, Frankfurt/M 1984. S.239.)。これをあえて暴力というならば, 一種の暴力であろう。恣意性が〈自明性〉と化す瞬間である。
- (33) 拙稿「記号学的〈恣意性〉の自明化過程」,『九州大学大学院教育学研究紀要』創刊号, 1999, 所収, 参照。
- (34) ロビン・ダンバー(Robin Dunbar)「言語の起源」, 松沢哲郎・長谷川寿一編『心の進化——人間性の起源を求めて』岩波書店, 2000, 所収, 参照。

- (35) けれども、その時期を過ぎたからといって言語の習得が不可能になるわけではない。事実、われわれは母語以外の言語を長じたのちにも学んでいる。ただし、ネイティブと同等のところに達するのはきわめて困難であることは、誰もがよく知るところである。
- (36) Terrence W. Deacon, *The Symbolic Species - The Co-evolution of Language and the Brain*, New York 1998. pp.110-142. ディーコン『ヒトはいかにして人となったか——言語と脳の共進化』新曜社, 1999, 118-159頁。
- (37) ピンカーは「本能」という用語を使うが、「本能」が個体（種）を機能的・適応的に生存させるべく導くプログラムだと考えるなら、なるほど「言語の本能」はヒトに宿っているといえるかもしれない。しかし、言語習得の後、それは反省的知性へと展開し、したがって「本能」とは完全に手を切るに至ると考えねばならない。いわばみずからを裏切り、みずからの母体を葬るのである。S.ピンカー『言語を生み出す本能（上）』日本放送出版協会, 1995。
- (38) 文化的淘汰圧は、競争をも運命づける。スピードを要請するのである。この速度について、何をもってメルクマールとできるだろうか。さしあたり経験的に考えられるのは、以下の三指標である。すなわち、1. 生産性・破壊性, 2. 空間移動, 3. 情報伝達。ちなみに西洋の三大発明（異論もあるが）が火薬・羅針盤・印刷術とされるのは象徴的である。現代の危機、とりわけ技術化の果ての危機は、この加速度性に由来するといえないか。
- (39) このように述べることによって、ヒトが進化の最先端に位置するなどと主張しているわけではまったくない。ポルトマン（Adolf Portmann）のような段階的進化説ではなくて、分岐的進化説（濱田穰「コドモ期が長いというヒトの特徴」、松沢・長谷川編『心の進化』182頁）をとろうとも、このことは当てはまるはずである。
- (40) ここで想定しているのは、たとえばドーキンスのいわゆる（自己複製子に対して）「反抗する知性」である。cf. R. Dawkins, *The Selfish Gene*, Oxford 1976. Chap. 11. ドーキンス（日高敏隆・岸由二・羽田節子・垂水雄二訳）『利己的な遺伝子』紀伊國屋書店, 1991, 第11章, 参照。



## Neoteny and "Child"

— the price for acquirement of language —

Toshihiko TSUCHIDO

Neoteny means that the features of larva or fetus are still conserved into imago. Homo is also neotenous, though the neoteny in behavior is remarkable here.

The neoteny of Homo is concerned with the "Child" in Man, which should mean a kind of disposition of purposelessness, fantasy, unusualness, uncalculativeness etc. in e.g. play.

For Man the relation to environment is not fixed and the future is radically suspended. Even though grown into adult, therefore, Man has too much curiosity and often acts without purpose and necessity. Thus "Child" has remained there into the adult.

On the other hand "Adult" appears already in childhood because the arbitrariness of language provides foundation of "self-evidence" as the property of "Adult". Man has become neotenous creature for the acquirement of language.

But a question remains; How are the neoteny of Man and his self-consciousness coincident with each other? Or rather, how can the biological explanation and the philosophical question encounter?